

平成 29 年度文部科学省私立大学研究ブランディング事業
『帝塚山プラットフォーム』の構築による学際的「奈良学」の研究

聖徳太子関連遺跡の研究

—法隆寺創建瓦生産窯の調査—

令和 2 (2020) 年 3 月
帝塚山大学考古学研究所

序 文

古都・奈良の地にある帝塚山大学では「奈良学」を提唱し、これまで奈良に関わる様々な研究を進めてきました。平成 29 年度からは文部科学省私立大学研究ブランディング事業に採択された『『帝塚山プラットフォーム』の構築による学際的「奈良学」研究の推進』をテーマに、産・官・学との連携による「奈良学」研究を通して、地域の活性化や創生に取り組んでおります。

本学の附置機関である帝塚山大学考古学研究所が中心となって取り組んでいる「聖徳太子関連遺跡の研究」も、私立大学研究ブランディング事業にともなう「奈良学」研究の一環として実施いたしました。

聖徳太子は教科書にも登場する日本史上の最も有名な人物のひとりですが、その生涯は謎に包まれています。今回の研究では、考古学研究所が長年取り組んでいる古代瓦という視点から聖徳太子の事跡に迫りました。

本書は、聖徳太子が建立した法隆寺と同じ瓦が採集された奈良県生駒市高山町と同生駒郡三郷町勢野東で実施した調査研究の成果を報告したものです。本書が聖徳太子や法隆寺を深く理解するうえでの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査研究にあたり、ご協力いただきました生駒市高山町、生駒郡三郷町や地元自治会をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げます。

令和2年3月14日

帝塚山大学
学長 蓮花 一己

例 言

1. 本書は、平成 29 年度文部科学省私立大学研究ブランディング事業に帝塚山大学が申請し、採択された『『帝塚山プラットフォーム』の構築による学際的「奈良学」の研究』に関連して、帝塚山大学考古学研究所が実施した「聖徳太子関連遺跡の研究」の成果報告書である。
2. 本研究に関わる 2 地域（奈良県生駒市高山町・同生駒郡三郷町勢野東）の遺跡踏査は、帝塚山大学考古学研究所が実施した。
3. 生駒市高山町の踏査は平成 30（2018）年 3 月 24・25 日、三郷町勢野東の踏査は平成 31（2019）年 2 月 24 日に実施した。
4. 遺跡踏査の体制は以下のとおりである。

総括 所長 清水昭博
事務 職員 有賀朋子、西村はるか
調査 参加者 [生駒市高山町の踏査]
高田照世（帝塚山大学・准教授）、伊藤純（同・非常勤講師）、西連寺匠（同・人文科学研究科博士後期課程 1 回生）、清水智子（同・博士前期課程 1 回生）、山本剛史（同）、能勢麻由佳（同・文学部 4 回生）、板野孝則（同 3 回生）、瀬口泰弘（同）、富島健司（同）、長渕好太郎（同）、中山修治（同）、川村峻太（同 2 回生）。
[三郷町勢野東の踏査]
山本剛史（帝塚山大学人文科学研究科博士前期課程 2 回生）、能勢麻由佳（同・博士前期課程 1 回生）、瀬口泰弘（同・文学部 4 回生）、富島健司（同）、長渕好太郎（同）、赤嶋麻衣（同 3 回生）、宇賀貴広（同）、川崎敬太（同）、川村峻太（同）。 ※所属・学年は調査当時
5. 本研究および本書の作成に際しては、次の機関ならびに各位からご助言、ご協力をいただいた。安西工業株式会社、生駒市高山町芝自治会、大御堂観音寺、三郷町、三郷町勢野北垣内自治会、史学さんごう、高山文化研究会、地域文化研究所、両槻会、有山雄基、井上直行、瓜生和弘、江崎周二郎、大塚慎也、岡島颯斗、奥田拓男、尾山雅邦、岡島颯斗、甲斐弓子、木村友紀、久保直子、桑原正睦、小柴昌也、後藤完二、小西聡、佐橋徹、佐藤右文、柴田正彦、白樫淳、杉浦隆支、多賀久彦、竹田泰博、田中充、辻孝三、寺農織苑、戸花亜利州、西邦和、西川正人、西垣遼、野口朗人、服部敦子、松村茂、三神栄弘、三津井清隆、森宏範、森田誠一、矢田直樹、湯地健一、吉澤清行、蓮花一己（敬称略、五十音順）。
6. 調査に関わる空中写真・測量は株式会社アコード、関西美術印刷株式会社、有限会社アクセスに委託した。
7. 本書の編集は清水が主となり、西村、有賀が補助し実施した。執筆は清水が担当した。
8. 本研究に関わる資料は、帝塚山大学考古学研究所が保管している。

目次

1. はじめに	1
2. 調査研究の概要	1
(1) 研究活動スケジュール	1
(2) 研究活動の概要	2
3. 法隆寺創建瓦生産窯の調査	4
(1) 調査研究の経緯	4
(2) 奈良県生駒市高山町（北倭村窯）	5
(3) 奈良県生駒郡三郷町勢野東（北垣内窯）	7
4. まとめ	10
5. 考察	11

1. はじめに

本研究(「聖徳太子関連遺跡の研究」)は、平成29(2017)年度に文部科学省私立大学研究ブランディング事業(タイプA【社会展開型】)に帝塚山大学が申請し、採択された『帝塚山プラットフォーム』の構築による学際的「奈良学」の研究の一環として、本学の附置施設である帝塚山大学考古学研究所(所長:文学部教授・清水昭博)が主体となり、実施したものである。

聖徳太子は小学校の教科書にも登場する日本史上の有名な人物である。また、太子は斑鳩に宮殿をおくなど奈良に関わりの深い人物でもある。しかし、太子に関わる同時代史料は少なく、その事跡については謎が多い。

奈良には斑鳩町・法隆寺をはじめ太子に関連する寺院や遺跡が数多くある。そうしたなか、聖徳太子関連の遺跡から出土する瓦などの出土遺物に注目し、それらを調査研究することによって、記録では知りえない聖徳太子の業績を解明することを目的として、「聖徳太子関連遺跡の研究」では考古学の視点から聖徳太子にアプローチすることとした。

特に、今回の研究では、本学考古学研究所の主要な研究テーマである「古代瓦」に着目し、聖徳太子が建立した法隆寺の創建期(7世紀前半)と同範の瓦が採集され、法隆寺の瓦の生産地と推定される奈良県生駒市高山町(北倭村窯)および同生駒郡三郷町勢野東(北垣内窯)において、瓦窯の確認を目的とした遺跡踏査を実施した(図1)。

2. 調査研究の概要

ここでは調査研究の概要として、平成29(2017)～令和元(2019)年度の3ヶ年の研究活動のスケジュールとその概要について報告する。

(1) 研究活動スケジュール

[平成29(2017)年度]

2018年2月 3日: 生駒市高山町の高山文化研究会例会で講演(「聖徳太子と高山を結ぶもの～北倭村山田発見の瓦～」)。

2018年2月23日: 生駒市高山町の遺跡踏査について高山町自治会に説明。

2018年3月24日: 生駒市高山町の遺跡踏査(1日目)、ラジコンヘリによる空中写真撮影。

2018年3月25日: 同 (2日目)。

[平成30(2018)年度]

2018年7月 4日: 三郷町勢野東・北垣内地区の遺跡踏査について三郷町生涯学習課と打ち合わせ。

2018年11月14日: 東近江市能登川博物館・同埋蔵文化財センター共催展示「東近江の古代寺院とその源流～東アジアからの道～」開幕(～12月23日)。

2018年11月24日：東近江市共催シンポジウム「東近江の古代寺院の源流を探る」開催。
2018年12月8日：東近江市共催展示関連イベント「ホンモノ古代瓦拓本体験！」開催。
2019年2月4日：生駒市寺院の鬼瓦調査（長福寺・宝幢寺・円福寺）。
2019年2月20日：生駒市・斑鳩町寺院の鬼瓦調査（長弓寺・西光寺）。
2019年2月24日：三郷町勢野東北垣内地区の遺跡踏査、ドローンによる空中写真撮影。
2019年2月26日：斑鳩町中宮寺跡出土瓦の調査、写真撮影（1日目）。
2019年2月27日：同（2日目）。
2019年3月14日：三郷町共催展展示資料を三郷町文化センターに搬入、展示。
2019年3月15日：展示作業。
2019年3月16日：共催展「ねえ、平隆寺って知ってる？－瓦でみる古代三郷の歴史－」
開幕。
2019年3月23日：三郷町共催講演会「法隆寺の瓦を求めて－聖徳太子と古代の三郷－」、
遺跡ウォーク「平隆寺とその周辺の古代瓦窯を歩く」、展示解説を実施。
2019年3月24日：展示閉幕。
2019年3月25日：展示撤収。
[令和元(2019)年度]
2019年7月6日：城陽市歴史民俗資料館共催特別展「自瓦自賛－瓦を解き明かす－」
開幕（～9月8日）。
2019年10月2日：島本町教育委員会共催企画展「鈴谷瓦窯と東大寺」を島本町歴史文化
資料館において開催（～12月3日）。
2019年10月5日：島本町共催展関連イベント「瓦ストラップ・マグネットづくり」開催。
2019年10月12日：島本町共催展関連イベント「瓦拓本体験」開催。
2019年10月27日：島本町共催展関連講演会「やさしい古代瓦の歴史」開催。
2019年11月11日：京都府京田辺市大御堂観音寺（普賢寺跡）の現地調査。
2020年3月16日：普賢寺跡の調査（三次元レーザー計測）。

(2) 研究活動の概要

私立大学研究ブランディング事業の採択期間に合わせ、本研究（「聖徳太子関連遺跡の研究」）は平成29（2017）～令和元（2019）年度の3ヶ年のスケジュールで計画を立て、実施した。

本研究の初年度にあたる平成29（2017）年度には、法隆寺の創建期（7世紀前半）の瓦生産地を特定するために、生駒市高山町において遺跡踏査を平成30（2018）年3月24・25日の2日間にわたって実施した。踏査地点はかつて法隆寺創建瓦と同範の瓦が採集された生駒市高山町の旧北倭村山田地区で、同町において瓦窯跡の場所を特定するために学生・大学院生や地元の方々と踏査をおこない、遺物の散布状況を確認し、現地の現況を記録として保存するために空中写真（ラジコンヘリによる撮影）および地上写真撮影をおこなった。



図1 法隆寺と北倭村窯・北垣内窯



図2 法隆寺・北倭村窯・北垣内窯の瓦（1：4）

平成 30（2018）年度には、前年度に生駒市高山町で実施した調査と同様に、法隆寺創建瓦の同範瓦が採集され、瓦窯の存在が推定される生駒郡三郷町勢野東の北垣内地区において平成 31（2019）年 2 月 24 日に分布調査を実施した。併せて調査地点の現況の写真撮影を地上および空中（ドローンによる撮影）からおこなった。また、法隆寺の瓦を焼成した重要な瓦窯跡があることを地元で普及すべく、3 月 23 日には調査に関連して三郷町と共催で講演会「法隆寺の瓦を求めて―聖徳太子と古代の三郷―」と遺跡ウォーク「平隆寺とその周辺の古代瓦窯を歩く」を開催し、3 月 16～24 日の期間には三郷町共催展「ねえ、平隆寺って知ってる？―瓦でみる古代三郷の歴史―」を開催した。

研究最終年度にあたる令和元（2019）年度にはこれまでの調査研究の成果をまとめ、報告書を作成し（本書）、さらに、本研究の成果の一部を帝塚山大学出版会が出版する『奈良学研究所の現在Ⅱ』に掲載した（帝塚山大学奈良学研究所推進室 編 2020）。

また、約 1400 年前の飛鳥寺や法隆寺にはじまる、奈良を発祥の地とする日本瓦の歴史を紹介すべく、平成 30（2018）年度には滋賀県東近江市能登川博物館・同埋蔵文化財センター、令和元（2019）年度には京都府城陽市歴史民俗資料館、大阪府島本町教育委員会との共催展示を実施した。

なお、本研究の成果を一般に公表すべく、令和 2（2020）年 2 月 29 日に大阪府枚方市・メセナひらかた、3 月 14 日に奈良学フォーラム（奈良春日野国際フォーラム 豊・能楽ホール）、3 月 28 日には本学考古学研究所・附属博物館の第 442 回市民大学講座で「聖徳太子関連遺跡の研究」に関連する講演を予定していたが、新型コロナウイルスの被害拡大の影響により中止した。

3. 法隆寺創建瓦生産窯の調査

(1) 調査研究の経緯

本研究では、考古学の立場から聖徳太子の事跡にアプローチする。奈良には法隆寺をはじめ太子に関連する寺院や遺跡が数多くあるが、本研究では帝塚山大学考古学研究所が長年研究のテーマとしている古代瓦に注目し、研究をおこなうこととした。

聖徳太子が建立した法隆寺は、今もその法灯を灯し続けている。法隆寺西院伽藍は世界最古の木造建築で、世界遺産にも登録されている。

だが、西院伽藍の建築は聖徳太子の時代のものではなく、のちに再建されたものである。『日本書紀』に天智 9 (670) 年に法隆寺が火災により全焼したとの記事がある。その記事を巡っては明治以来、論争が繰り広げられた（法隆寺再建非再建論争）。

しかし、昭和 14 (1939) 年に南大門の東南で、7 世紀前半の瓦をとまう創建法隆寺、若草伽藍が発見され、ひとまずは論争に決着がついた。また、この調査以降、法隆寺境内では工事を契機に様々な地点で発掘調査が実施され、若草伽藍に関わる多くの遺構、遺物が出土している。

そうしたなか、法隆寺（若草伽藍）に関わるこれまでの調査研究で、建物ごとに異なる瓦が使用されていることが明らかにされている。金堂では 2 種類（3Bb と 4A）の軒丸瓦を所用し、前者は飛鳥寺や豊浦寺、後者は四天王寺と同範であることも解明されている（図 2-1・2、毛利光ほか 1992）。

さらに注目すべきは、本報告で述べるように、一見、法隆寺とは何のかかわりもないような場所から同範の瓦が出土することである。本学にも近い奈良県生駒市高山町で軒丸瓦 3Bb、法隆寺に近い生駒郡三郷町勢野東で 4A の同範品が出土しているのである（図 2-3・4）。これらの採集地はその周辺の地形や立地から、法隆寺の瓦の生産地と推定され、学史的に、前者を北倭村窯、後者を北垣内窯と呼んでいる。

今回の研究では両窯に着目し、生駒市高山町と生駒郡三郷町勢野東の 2 地域で各々、所在が明らかになっていない北倭村窯、北垣内窯のありかを確認するために遺跡踏査を実施することとした。

遺跡踏査は 2 ヶ年の計画で実施した。すなわち、平成 29 (2017) 年度に生駒市高山町、平成 30 (2018) 年度に生駒郡三郷町勢野東において踏査をおこなった。以下に、各遺跡踏査の概要について報告する。

(2) 奈良県生駒市高山町（北倭村窯）

遺跡名：北倭村窯（所在不明）

調査地：生駒市高山町（旧北倭村山田）周辺

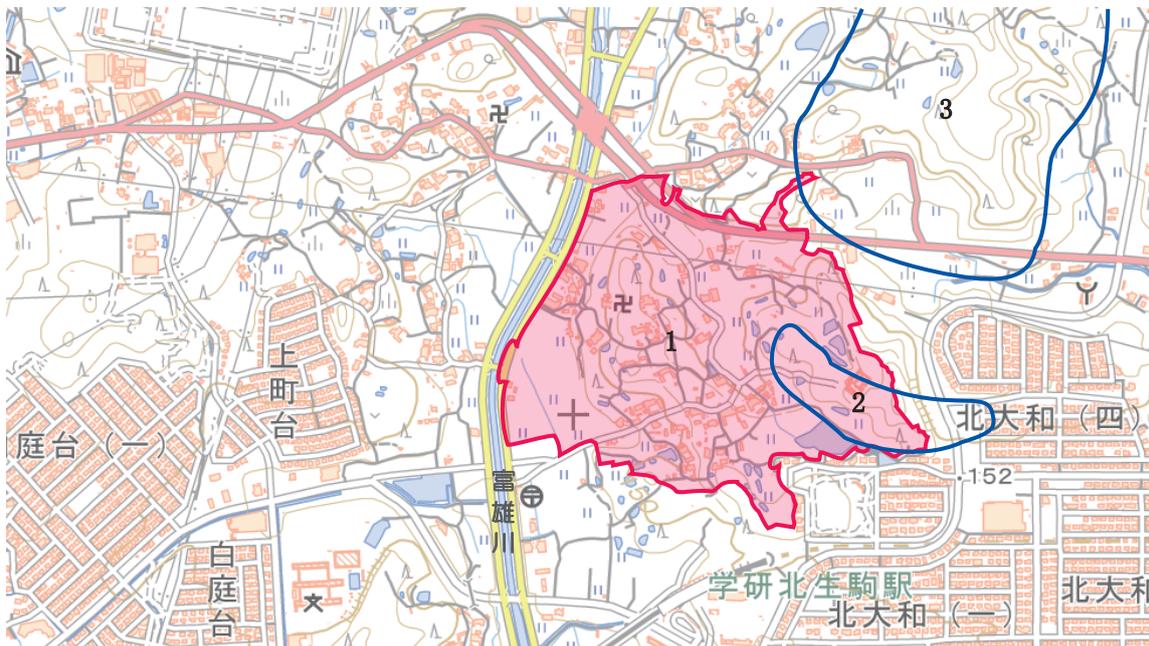
調査年月日：平成 30 (2018) 年 3 月 24・25 日

調査目的：法隆寺（若草伽藍）創建瓦の瓦窯（北倭村窯）の所在解明

調査方法：表面調査（瓦の散布を確認）、地上写真撮影、ラジコンヘリ空中写真撮影

調査の経緯と結果

奈良県生駒郡北倭村で採集された瓦を最初に紹介したのは田中重久である。田中は昭和 13 (1938) 年に『考古学』第 9 卷 11 号に発表した「平隆寺の研究」のなかで、平隆寺の瓦窯である瓦陶兼業窯の今池瓦窯の類例として「北倭村瓦窯（奈良縣生駒郡北倭村山田）」を紹介し、同窯から採集された瓦の拓本を掲載している（田中 1938）。この報文によって、田中が同窯を瓦とともに土器（須恵器）を焼成する瓦陶兼業窯と認識していたことがわかる。



1 旧北倭村山田

2 山田古窯跡群
(1D-0010)

3 須恵器散布地
(1D-0021)

図3 北倭村窯（生駒郡高山町）周辺

また、昭和 53（1978）年に刊行された『奈良朝以前寺院址の研究』掲載の図 28 には「1：斑鳩寺の瓦を焼いた北倭村瓦窯（天理図書館蔵）」の注記とともに、素弁九弁蓮華文軒丸瓦の拓本が掲載されており（田中 1978）、田中が北倭村の瓦が斑鳩寺、すなわち法隆寺と同じもので、北倭村の瓦を瓦窯の産物と解釈していたことがわかる。

昭和 61（1986）年に菱田哲郎は瓦陶兼業の例として北倭村窯を取り上げ、奈良県生駒市山田に同窯が所在すること記し、「初期の瓦窯と関連寺院」の図中に北倭村窯の場所を示している。平成 4（1992）年に刊行された法隆寺の瓦の総合調査報告書である『法隆寺の至宝（瓦）』の解説では、軒丸瓦 3Bb を若草伽藍金堂の創建瓦とし、奈良北倭瓦窯産と推定する（毛利光ほか 1992）。飛鳥時代前半期の軒丸瓦を分析した大脇潔も法隆寺 3Bb が生産された窯を所在未確認としながらも、瓦陶兼業窯である生駒市北倭窯とする田中説を紹介している（大脇 1994）。

その後、筆者も法隆寺軒丸瓦 3Bb の生産地として生駒市高山の北倭村とする田中説を紹介し（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1999、清水 2012）、後者において大まかな地点を図に示した。

以上、田中重久によって学界に紹介された北倭村瓦窯は、研究者によって北倭村窯、奈良北倭瓦窯、北倭窯などと呼称は異なるものの、法隆寺（若草伽藍）金堂所用瓦である軒丸瓦 3Bb を生産した瓦陶兼業窯として認識されてきたといえる。

しかし、これまでの研究史において、同窯の実態が深く追及されることはなかった。そこで、筆者は平成 24（2012）年、田中が『奈良朝以前寺院址の研究』で北倭村瓦窯の瓦を天理図書館蔵と注記していることを手掛かりに、天理大学に問合せ、原品が天理参考館に所蔵されていることを確認し、同年 5 月 7 日に調査を実施した（註 1）。

その結果、当該資料は素弁九弁蓮華文軒丸瓦で、これまでの研究で指摘されているように法隆寺 3Bb と同範の瓦であり、裏面に「北倭山田村出土」と墨書きがあることを確認した。また、製作技法は法隆寺と一致し、胎土や焼成も近いことから、法隆寺 3Bb が「北倭山田村」で生産された可能性は高いと判断した。

つぎに問題となるのは北倭村窯がどこに所在するのかということである。田中の著作と天理参考館所蔵品の注記によって北倭村窯が北倭村山田に所在することが判明する。北倭村は明治 22 (1889) 年の町村制施工により高山村・鹿畑村・上村・南田原村・北田原村の 5 つの村が合併して成立したが、昭和 32 (1957) 年に生駒町に編入し、消滅している。北倭村は現在の生駒市北部にあたる。

現在、生駒市に北倭村山田に関わる地名は残らないが、旧山田地区は近鉄けいはんな線学研北生駒駅(生駒市上町)北側で、西は富雄川、東は高山町と奈良市北大和 4 丁目の境界、北は国道 163 号線、南は四季の森公園北縁までの約 500 メートル四方の地域に相当する(図 3-1、註 2)。

今回の踏査では、北倭村窯の所在を明らかにすべく、地元高山町芝地区自治会、高山文化研究会のご協力のもと、旧北倭村山田とその周辺において遺跡確認の表面調査を実施した。表面調査は旧山田地区とともに、旧山田地区とは富雄川をはさんだ対岸で、飛鳥時代の瓦窯の立地に適った丘陵斜面とその下位に位置する平坦面(水田・畑)を含めて実施した(図 3)。

結果的には、今回の踏査では土器細片や陶磁器などごくわずかな遺物の散布は確認できたが、瓦窯の痕跡を示す地形や瓦など顕著な遺物は確認できず、北倭村窯の所在を特定することはできなかった。

しかし、旧北倭村山田においてはじめて北倭村窯に対する学術的な調査を実施し、当地が瓦窯の立地に適した地形であることを改めて確認できたことは重要な成果である。旧山田地区には奈良時代の須恵器を生産した山田古窯跡群(『奈良県遺跡地図』1D-0010)があり、その北方にも須恵器散布地(『奈良県遺跡地図』1D-0021)があることも(図 3-2・3)、この地が窯業生産に適した土地であることを示しており、重要である。

北倭村窯の存在が推定される旧山田地区と法隆寺の距離は直線で約 12.6 キロメートルと近くはない(図 1)。ただ、旧山田地区の西を流れる富雄川を下れば斑鳩の地であり、北倭村窯が水上交通路としての富雄川を意識した地に設けられたことは間違いなからう(写真6)。

註

- (1) 北倭村窯出土瓦の調査に際しては、天理大学附属天理参考館の藤原郁代氏、太田三喜氏(当時)のお世話になりました。ここに記し、感謝申し上げます。
- (2) 旧北倭村山田の範囲については高山文化研究会の尾山雅邦氏にご教示いただきました。ここに記し、感謝申し上げます。

(3) 奈良県生駒郡三郷町勢野東(北垣内窯)

遺跡名 : 北垣内窯(所在不明)

調査地 : 奈良県生駒郡三郷町勢野東・北垣内地区周辺

調査年月日 : 平成 31 (2019) 年 2 月 24 日

調査目的 : 法隆寺(若草伽藍)創建瓦の瓦窯(北垣内窯)の所在解明

調査方法 : 表面調査(瓦の散布を確認)、地上写真撮影、ドローン空中写真撮影



- 1 北垣内地区 2 平隆寺 3 上ノ御所瓦窯 4 今池瓦窯 5 辻ノ垣内瓦窯

図4 北垣内窯（生駒郡三郷町勢野東）周辺

調査の経緯と結果

三郷町勢野東の北垣内地区で地元個人が採集した素弁八弁蓮華文軒丸瓦は、最初に発掘調査報告書『平隆寺』に掲載された(白石・亀田 1984)。同報告では若草伽藍創建時に用いられ、四天王寺と同範とされる瓦に近似しているとの評価を与え、北垣内を含む平隆寺北方窯跡群で生産された瓦が法隆寺や中宮寺など斑鳩の古代寺院に供給されたことを示唆した。この説を受けて、花谷浩は法隆寺 4Aの瓦窯を平群寺(平隆寺)跡近くに存在するとし(花谷 1993)、大脇潔は法隆寺 4Aを生産した所在不明の瓦窯の候補地を平隆寺北方窯群とする報告書の説を引用した(大脇 1994)。

『平隆寺』に掲載された瓦は、現在、橿原考古学研究所附属博物館が所蔵する。『大和考古資料目録 23 (飛鳥・奈良時代寺院出土の軒瓦)』の目録番号 1792 の瓦は法隆寺 4A と同範であり(近江 1998)、筆者も北垣内地区周辺で生産された製品が法隆寺に供給された可能性は高いと考える(清水 2012)。

今回の調査では、地元、三郷町教育委員会や北垣内自治会、歴史サークル「史学さんごう」のご協力のもとで、北垣内窯の存在が推定される三郷町勢野東の北垣内地区周辺を踏査し、合わせて、近在の辻ノ垣内瓦窯、今池瓦窯の現地調査をおこなった(図 4、註)。

当日は、近鉄勢野北口駅に集合し、北垣内自治会の案内を得て、北垣内地区を踏査し、未確認の北垣内窯の所在について地元の方々の意見をうかがった。同地区では信貴川両岸に瓦窯の立地に適う丘陵斜面が形成されており、そうした地点を中心に踏査をおこなったが、残念ながら、今回の踏査では瓦窯の痕跡を示す地形や瓦などの遺物の散布を確認することはできなかった。

結果として、今回の調査では瓦窯の場所を特定することはできなかった。しかし、北垣内地区周辺には瓦窯の立地に適した丘陵傾斜面が存在する。また、近年、北垣内地区に隣接する三郷町勢野北の辻ノ垣内瓦窯が発見され(図 4-5)、若草伽藍と同様の特徴をもつ丸瓦も出土している(鶴見 1998、清水 2000)。また、法隆寺 4A の同範瓦は平隆寺(図 5-1、森 2009、能勢 2019)や平隆寺の東方にその所在が推定される八幡堂跡(所在不明)からも出土しており(図 5-2、保井 1932、元興寺文化財研究所 2019)、こうした状況は法隆寺の瓦が平隆寺周辺で生産された可能性をより強く示しているといえる。



図 5 平隆寺・八幡堂跡の瓦(縮尺不同)

北垣内地区と法隆寺は約 3.5 キロメートルとさほどの距離ではない（図 1）。本書「考察」でも詳述するように、古代、平群を拠点とした豪族、平群氏と聖徳太子との深い関わりのなか、同地で創建法隆寺の瓦生産がおこなわれたものとする。

註

三郷町勢野東北垣内地区の範囲については、三郷町教育委員会生涯学習課・大塚慎也氏のご教示を得ました。ここに記し、感謝申し上げます。

4. まとめ

平成 29 年度に文部科学省私立大学研究ブランディング事業として採択された『『帝塚山プラットフォーム』の構築による学際的「奈良学」の研究』の一環として、帝塚山大学考古学研究所では「聖徳太子関連遺跡の研究」をテーマとして 3 ヶ年にわたり研究活動を実施した。

特に、本研究では、考古学研究所が主な研究テーマとしている古代瓦に焦点をあて、聖徳太子が建立した法隆寺（若草伽藍）の創建瓦と同範の瓦が採集された奈良県生駒市高山町（北倭村窯）と同生駒郡三郷町勢野東（北垣内窯）のふたつの地域で瓦窯の所在を確認すべく、遺跡踏査を実施した。

結果的には両地域とも現状では瓦の散布を確認できず、瓦窯の場所を特定するには至らなかった。しかし、生駒市高山町、三郷町勢野東の両地域とも飛鳥時代の登窯の立地に適した丘陵の斜面地があり、瓦窯が存在した可能性は十分にあると判断できる。天理大学附属天理参考館や奈良県立橿原考古学研究所附属博物館が所蔵する瓦も、いつの時代にかこの地で採集され、今に伝えられてきたものであろう。

聖徳太子と生駒市、三郷町をつなぐ糸口は丘陵のどこかに眠っているはずである。帝塚山大学考古学研究所では今後も学生とともに地域と協働し、調査研究を続けていく所存である。

5. 考 察

聖徳太子と古代の三郷

清水 昭博

はじめに

帝塚山大学では平成 29 (2017) 年度に採択された文部科学省私立大学研究ブランディング事業『『帝塚山プラットフォーム』の構築による学際的『奈良学』研究の推進～』を実施している。同事業に関連して、帝塚山大学考古学研究所では奈良にゆかりの深い古代史上の人物に焦点を当て、「聖徳太子関連遺跡の研究」をテーマとした研究を進めている。

「聖徳太子関連遺跡の研究」に関連して、平成 29 (2017) 年度には聖徳太子が建立した法隆寺（創建法隆寺、若草伽藍）の瓦を焼成した瓦窯（北倭村窯、たなか 1978）の存在が推定される奈良県生駒市高山町の踏査や地元向けの講演会を実施した。

平成 30 (2018) 年度には同じく創建法隆寺の瓦を焼成した瓦窯（北垣内窯、白石・亀田 1984）の存在が推定される奈良県生駒郡三郷町勢野東地区において踏査を実施し、合わせて、地元三郷町で本学が所蔵する古代瓦の特別展示や本学学生による関連遺跡のウォーキングイベント、講演会を開催した（能勢 2019、山本ほか 2019）。

本論では平成 30 (2018) 年度の調査に関連し、法隆寺の瓦を中心として、三郷町に所在する古代寺院である平隆寺やその周辺の瓦窯から出土した瓦を考古学的に検討し、聖徳太子と古代の三郷の関係を明らかにする（註）。

I. 聖徳太子と法隆寺

聖徳太子は用明天皇の皇子で、厩戸皇子、豊聡耳皇子、上宮太子とも呼ばれる。推古天皇の時代に冠位十二階や憲法十七条を制定するなど、飛鳥時代初期の政権の中枢において大きな役割を担った古代史上、最も有名な人物であるといつてよい。

飛鳥時代寺院のひとつである法隆寺は聖徳太子が建立した寺であり、大和斑鳩の地に建立された。法隆寺が斑鳩に建立された理由は、聖徳太子が同地を拠点としたからである。『日本書紀』によると、聖徳太子は推古 9 (601) 年に斑鳩で宮室、すなわち、斑鳩宮の造営を開始し、同 13 (605) 年に遷宮している。その後、太子は生涯、斑鳩の地を動かず、同 30 (622) 年に斑鳩宮で薨去している。斑鳩宮は山背大兄皇子の時代に蘇我入鹿らの軍勢によって攻められ、皇極 2 (643) 年に焼失している。

斑鳩宮の場所が現在の法隆寺東院伽藍の地であることは、斑鳩宮跡の荒廃を憂えて

上宮王院（法隆寺東院伽藍）の建立を孝謙天皇に奏上した奈良時代の僧・行信の言によって明らかである（『法隆寺東院縁起』）。また、実際に東院伽藍周辺の発掘調査によって斑鳩宮跡の一部と考えられる掘立柱建物跡や溝跡などがみつまっている（国立博物館 1948）。斑鳩宮の場所が明らかになったことで、法隆寺が斑鳩宮に併設して建立されたことも判明した。同じように、宮殿に寺院を併設するものに舒明天皇による百濟大宮と百濟大寺があるが（『日本書紀』舒明天皇 11/639 年）、斑鳩宮と法隆寺はその先駆としても重要である（清水 2007）。

聖徳太子建立の寺として著名な法隆寺であるが、『日本書紀』などの歴史書は建立の年代を記さない。しかし、その建立は太子が斑鳩に宮を遷した年（推古 13/605 年）の 2 年後にあたる推古 15（607）年（法隆寺金堂薬師如来像の光背銘文による）頃とみてよいと思われる。その後の法隆寺について、『日本書紀』は天智 9（670）年の火災により焼失したと記す（「夏四月癸卯朔壬申、夜半乃後、災法隆寺。一屋無余。大雨雷震。」）。この火災記事をめぐっては、明治時代以来、論争が繰り広げられ、その正否が議論された（清水 2001）。

しかし、昭和 14（1939）年におこなわれた法隆寺南大門東方の通称「若草」の地でおこなわれた発掘調査によって、現法隆寺とは別の伽藍（若草伽藍）が発見されたことによって、ひとまずは論争に終止符が打たれることになった（石田 1969）。また、平成 16（2004）年の南大門付近の発掘調査で飛鳥時代の焼けた壁画片や瓦が出土したことにより、若草伽藍が火災に遭ったことも判明し（斑鳩町教育委員会 2004）、『日本書紀』の記録の確かさを証明することになった。

昭和 14 年の発掘調査は南大門東方の塔心礎周辺を中心におこなわれ、塔心礎地点で塔跡、その北方で金堂跡を検出し、若草伽藍が四天王寺式伽藍配置という飛鳥時代初期に特有の伽藍配置をもつことも明らかになった（石田 1969）。

さらに、法隆寺境内から出土した瓦の考古学的研究によって、若草伽藍では堂塔ごとに異なる瓦を使用していたことも明らかになった（毛利光ほか 1992）。また、それらの年代観によって、若草伽藍の造営が太子の息子である山背大兄皇子の時代まで継続していたと考えられるようになっている。

II. 古代寺院と瓦

ところで、古代において瓦は仏教や寺院と密接な関係にあった。6 世紀中頃に朝鮮半島の百濟から仏教が伝来し、その約半世紀後の崇峻元（588）年にそれまでの日本列島にはなかった大陸風建築の飛鳥寺が蘇我馬子によって建立が開始された。その際、百濟から寺院建築に関わる技術のひとつとして、瓦づくりの技術がもたらされたのである（『日本書紀』）。それ以降、7 世紀末に宮殿建築にはじめて瓦が採用された藤原宮の造営まで、瓦はほぼ寺院建築の独占物であった（清水 1999）。

飛鳥寺から出土する瓦は朝鮮半島百濟様式で、当時、百濟の都であった扶餘（韓国忠清南道扶餘）の宮殿や寺院の瓦にきわめて似ている。飛鳥寺の創建瓦は文様によって二系統に大別される。すなわち、花卉の先端に三角形に切り込みを入れる「花組」と先端に円球状の珠文を入れる「星組」

1 飛鳥寺「花組」

2 飛鳥寺「星組」

3 四天王寺

図6 飛鳥寺と四天王寺の瓦 (1:4)

である(図6-1・2)。当然のことながら、百濟にも花組や星組のルーツとみられる瓦が多数、存在する。なかでも文様が近い百濟王宮の瓦が花組、百濟最初の本格的寺院である大通寺(527年創建、忠清南道公州市)の瓦が星組のモデルとなったものと考えられる(清水2012)。

飛鳥時代の軒丸瓦は箆と呼ぶ木製の型で製作される。複数の遺跡から同じ箆でつくられた瓦(同箆瓦という)が見つかる場合も多い。そうした例の代表が飛鳥寺、豊浦寺、法隆寺の同箆瓦である。飛鳥寺「星組」の箆は飛鳥寺で使用された後、飛鳥寺と同じ蘇我馬子の造営になる豊浦寺で使用され、その後、法隆寺(若草伽藍)にもたらされたことが判明している。こうした状況は箆の改変状況(蓮子を2個追刻)からわかる。また、同箆瓦とその技術によって、法隆寺の瓦づくりを飛鳥寺や豊浦寺と同じ系統の技術者が担当したことも明らかになっている(毛利光ほか1992、清水1999、花谷2000)。

法隆寺(若草伽藍)の創建瓦には2種類(3Bb・4A)の軒丸瓦が採用されている(図2-1・2)。3Bbは、先に述べた飛鳥寺や豊浦寺と同箆の瓦である。4Aは法隆寺のために制作された瓦である。後者の箆は法隆寺の瓦づくりの後、法隆寺と同じく聖徳太子の建立となる四天王寺に移され、使用されたことが判明している(図6-3、毛利光ほか1992、佐藤2000)。

法隆寺から四天王寺へという順序は、木製の箆に生じた傷の多さによってわかる。すなわち、法隆寺の瓦は傷が少ないが、四天王寺の瓦には傷が多く認められる。こうした観察によって、法隆寺から四天王寺へ箆が移動したことがわかるのである。

以上のように、同じ箆の文様の改変や傷の多さによって飛鳥寺、豊浦寺、法隆寺、四天王寺の瓦づくりの順序がわかった。瓦は建物を建立する段階で生産されるものである。したがって、瓦の製作順序は建物や建物によって構成される寺の造営順序を反映しているものとみることができる。

さらに、瓦によって寺院造営者の関係を理解することもできる。飛鳥寺、豊浦寺の造営に蘇我馬子、法隆寺、四天王寺の造営に聖徳太子が関わったことは記録からも明らかであるが、聖徳太子は蘇我氏の血をひく王族であり、そうした関係を背景に瓦を共有した可能性が高いと考えられるのである。

Ⅲ. 聖徳太子と平隆寺

つぎに、瓦から三郷町・平隆寺と聖徳太子の関わりを検討する。平隆寺は三郷町勢野東に所在する飛鳥時代創建の寺院である。聖徳太子が建立した法隆寺とは竜田川を隔て、直線で約 3.5 キロメートルの距離にある（図 1・4）。

古代の平群郡は那珂・飽波・平群・夜麻・坂門・額田郷の 6 郷で構成される（『延喜式』）。現在の三郷町是那珂郷を中心とする地域に相当する。那珂郷に関する記録に『信貴山寺資財帳写（信貴山文書）』（承平 7/937 年）がある。そこには「平群郡中郷九条十四里廿五廿六坪、四至限東公田限、限南谷神所、限西道、限北平隆寺地」とあり、その北限が平隆寺の寺地であったことがわかる。

現在の平隆寺は融通念仏宗に属する。本堂は文化 11（1814）年に建立された江戸時代後期の建築で、それ以前の建造物はない。平隆寺に関する最古の記録は、飛鳥池遺跡（奈良県明日香村）から出土した天武朝の木簡である。その木簡には大和にある寺院の名が列記されており、平隆寺の別名と考えられる平群寺の名がみえ（伊藤・竹内 2000）、史料から平隆寺が天武朝には存在していたことがわかる。

平隆寺の造営者について、聖徳太子関係の史料は太子の建立とする。鎌倉時代中期に法隆寺僧の顕真が著わした『聖徳太子伝私記』は太子建立四十六寺のひとつに数え、太子がこの地を訪れ、休んだ折、平群臣が香花供養した場所とする（「施鹿園院 法隆寺北山在之」紙背「或云平隆寺 此寺勢野郷、太子安息、平群臣等之香花供養時所也」）。

文明 15（1483）年の『太子伝玉林抄』は、太子行幸の際、犬にかみ殺された鹿のいた場所に建立した寺（鹿恩寺）とする（「太子四十三歳春三月河内国へ行幸ノ時ニ、於信貴山北山邊一ノ鹿犬ニ咋死、太子知過去因痛現在果、其跡ニ建立一宇伽藍鹿恩寺是也」）。

聖徳太子建立説のほか、女性（信女）が建立したとみる説がある。『太子伝玉林抄』（文明 2/1483 年）は信女を推古天皇とみる説と持統天皇とみる説があることを述べる（「一伝云、至于勢益之原、一人信女達小寺、口伝云、一人信女者推古天皇也 云々此時、以後経十年崩御也、彼寺之縁起見タリ、仲範云、治縁天皇之事也、平隆寺ナリ、私云信女者推古ト云ヒ治統ト云、二義也、小寺ハ異説無之」）。

一方、嘉吉元（1441）年の『興福寺官務牒疏』は、平隆寺を平群神手の創建とする（「平群寺 在平群郡勢益原 僧三十二坊、交衆二十一口、承仕十六人、推古天皇九年、平群神手将軍之本願也、本尊弥勒大士」）。

以上のように、平隆寺の造営者に関しては諸説がみられるが、平群郡那珂郷に所在する平隆寺を平群郡に拠点をおく平群氏が創建とみるのがもっとも理解しやすい。平群氏はヤマト政権の有力豪族であり、用明～推古天皇の時代には平群神手と宇志が大夫として国政に参画している。神手は用明 2（586）年に蘇我馬子の物部守屋討伐軍に加わっており、宇志は冠位十二階の小徳を授けられ、推古 31（623）年には征新羅副将軍に任じられている。後述するように、平隆寺の創建は 7 世紀初頭に遡り、時期的に平群神手や宇志の関わった可能性も大いにあるとみられる。

平隆寺では昭和44(1969)年に最初の発掘調査がおこなわれ、昭和49(1974)年に実施された寺域の範囲確認調査で塔跡が検出されている(白石・亀田1984)。その後、平成9(1997)年に塔基壇(東端)の調査がおこなわれ、その翌年の平成10(1998)年には金堂跡が検出されている(鶴見1997、清水1998)。また、平成10年の調査で塔の北方に金堂が位置することが明らかとなり、平隆寺が四天王寺式伽藍配置をもつことが確定している。

平隆寺では発掘調査や地表採集により飛鳥時代以降の瓦が多く出土しており、平隆寺の歴史を解明するてがかりとなる(清水2000、大西2009)。飛鳥時代の瓦で最も古いものは7世紀初頭の飛鳥寺星組系(素弁蓮華文)の瓦で、その後620年代の奥山廃寺式と豊浦寺式が続く。また、7世紀後半には法隆寺式(複弁蓮華文)の瓦を採用する。

飛鳥寺星組系の瓦(図5-1)は平隆寺の建物が7世紀初頭に遡ることを示す。しかし、この段階で造営されたのは小規模な仏堂程度で、金堂や塔などの主要堂塔を本格的に造営したのは620年代の奥山廃寺式や豊浦寺式の段階とみられる。また、7世紀後半の法隆寺式の瓦は伽藍の再整備にともなうものと推測される。

ところで、平隆寺から出土した飛鳥寺星組系の瓦は法隆寺や中宮寺と同範の瓦である(図2-2・図7、森2009、能勢2019)。また、三寺の瓦は製作技術や使用された土も近い。奥山廃寺式と豊浦寺式はどちらも中宮寺と同範の関係にある。また、法隆寺式は法隆寺と同範ではないが、その影響を受けて製作されたものである。

以上のように、平隆寺の瓦は法隆寺や中宮寺と共通し、平隆寺、法隆寺、中宮寺の深い関係を見出すことができる。そこに、平群氏が法隆寺、中宮寺を造営した聖徳太子やその一族である上宮王家との密接なつながりをもとに、平隆寺の造営をおこなった様子をうかがうことは可能であろう。

IV. 聖徳太子と平隆寺北方瓦窯群

古代の三郷と聖徳太子の関係を物語るのが、瓦を焼成した瓦窯の存在である。平隆寺の北方に広がる丘陵には飛鳥時代の瓦窯が集中して存在する(平隆寺北方瓦窯群)。遺跡として確認されている瓦窯には辻ノ垣内瓦窯、今池瓦窯、上ノ御所瓦窯があり、かつて法隆寺(若草伽藍)金堂所用瓦と同範の瓦が採集された三郷町勢野東の北垣内地区にも未知の瓦窯である「北垣内窯」の存在が想定される(図4)。

辻ノ垣内瓦窯は平隆寺北方瓦窯で唯一、発掘調査がおこなわれた瓦窯である(図4-5、鶴見1998)。4基の登窯が発見され、7世紀後半には平隆寺の瓦を焼成していることが明らかになっている。また、同窯からは7世紀初頭の須恵器や飛鳥寺星組系の技術によってつくられた丸瓦も出土しており、

図7 中宮寺の瓦(1:4)

その操業は7世紀初頭にまで遡るものと考えられる（清水 2000）。

今池瓦窯は三郷北小学校の北にある「今池」の東岸斜面に立地する（図 4-4）。発掘調査はおこなわれていないが、平隆寺や中宮寺と同範の奥山廃寺式、豊浦寺式軒丸瓦や須恵器が採集されている。620年代の平隆寺、中宮寺の造営にともない操業をはじめた窯である（田中重久 1938 清水 2000）。

上ノ御所瓦窯は現在の美松ヶ丘住宅西縁の小字「上ノ御所」で蓮華文鬼瓦等が採集され、瓦窯と推定されている遺跡である（図 4-3、白石・亀田 1984）。蓮華文は平隆寺の軒丸瓦と同じ文様であり、7世紀後半に平隆寺の瓦を焼成した瓦窯と考えられる。

北垣内窯は未確認の窯であるが、平隆寺の北に隣接する北垣内地区にその存在が推定される（図 4-1）。採集された瓦は法隆寺（若草伽藍）金堂と同範の瓦であり（近江 1998）、その操業は7世紀初頭に遡るものと考えられる。

以上のように、平隆寺北方瓦窯群で生産された瓦は地元の平隆寺だけでなく、聖徳太子建立の法隆寺や上宮王家の中宮寺にも供給されたことが明らかになっている。古代三郷の地は聖徳太子や上宮王家が法隆寺や中宮寺を建立するにあたり、その瓦づくりの中枢をになった地域といえるのである。

まとめ—聖徳太子と古代の三郷—

本論では、聖徳太子と古代の三郷の関係を明らかにすべく、法隆寺の瓦を中心に三郷町に所在する飛鳥時代創建寺院である平隆寺やその周辺の瓦窯から出土した瓦を考古学的に検討した。

その結果、平隆寺の瓦は聖徳太子とその一族である上宮王家が建立した法隆寺や中宮寺と同じ範の瓦を採用しており、平隆寺と法隆寺、中宮寺の深い関係を知ることができた。

また、その関係は平隆寺北方の丘陵に展開する平隆寺北方瓦窯群で生産された瓦が、地元の平隆寺だけでなく、法隆寺や中宮寺に供給されていることから理解することができた。古代三郷の地は聖徳太子、上宮王家が法隆寺や中宮寺を建立するにあたり、両寺で使用する瓦生産の中枢を担った地域といえる。

平群氏によって平隆寺が建立された7世紀初頭は、聖徳太子が生きた時代であった。平隆寺、平隆寺北方瓦窯群と法隆寺や中宮寺の瓦にみられる密接な関係は、古代に三郷を拠点とした豪族、平群氏と聖徳太子との深いつながりを示しているものと考えられるのである。

註

本論は平成 31（2019）年 3 月 23 日に三郷町文化センターにおいて三郷町と共催で実施した講演会「法隆寺の瓦を求めて—聖徳太子と古代の三郷—」の内容を論文としてまとめたものである。

参考文献

- 保井芳太郎 1932 『大和上代寺院志』 大和史学会
- 石田茂作 1936 『飛鳥時代寺院址の研究』 聖徳太子奉讃会
- 田中重久 1938 「平隆寺創立の研究」 『考古学』 第9巻第11号、東京考古学会
- 国立博物館 1948 『法隆寺東院における発掘調査報告書』
- 石田茂作 1969 『法隆寺雑記帖』 学生社
- たなかしげひさ 1978 「奈良朝以前寺院址随想」 『奈良朝以前寺院址の研究』 白川書院
- 白石太一郎・亀田博 1984 『平隆寺』 奈良県立橿原考古学研究所
- 毛利光俊彦・佐川正敏・花谷浩 1992 『法隆寺の至宝 第15巻(瓦)』 小学館
- 花谷浩 1993 「寺の瓦作りと宮の瓦作り」 『考古学研究』 第40巻第2号、考古学研究会
- 大脇潔 1994 「飛鳥時代初期の同範軒丸瓦－蘇我氏の寺を中心として－」 『古代』 第97号、早稲田大学考古学会
- 石田尚豊編 1997 『聖徳太子事典』 柏書房
- 鶴見泰寿 1997 「平隆寺第2次発掘調査概要」 『奈良県遺跡調査概報 1996年度(第1分冊)』 奈良県立橿原考古学研究所
- 近江俊秀 1998 『大和考古資料目録 第23集(飛鳥・奈良時代寺院出土の軒瓦)』 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 清水昭博 1998 「平隆寺第3次発掘調査概要」 『奈良県遺跡調査概報 1997年度(第1分冊)』 奈良県立橿原考古学研究所
- 鶴見泰寿 1998 「辻ノ垣内窯」 『大和を掘る16』 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 清水昭博 1999 『蓮華百相』 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 伊藤敬太郎・竹内亮 2000 「飛鳥池遺跡出土の寺名木簡について」 『南都佛教』 第79号、南都佛教研究会
- 佐藤隆 2000 「四天王寺の創建瓦」 『古代瓦研究Ⅰ』 奈良国立文化財研究所
- 清水昭博 2000 「平隆寺・中宮寺の創建瓦」 『古代瓦研究Ⅰ』 奈良国立文化財研究所
- 花谷浩 2000 「飛鳥寺・豊浦寺の創建瓦」 『古代瓦研究Ⅰ』 奈良国立文化財研究所
- 清水昭博 2001 『聖徳太子の遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 斑鳩町教育委員会 2004 『若草伽藍跡西方の調査』
- 清水昭博 2007 「斑鳩からみた飛鳥－飛鳥時代前半期の斑鳩－」 『都城 古代日本のシンボリズム』 青木書店
- 大西貴夫 2009 「平隆寺と長林寺の法隆寺式軒瓦」 『古代瓦研究Ⅳ』 奈良文化財研究所
- 森郁夫 2009 『新収の瓦－西上家寄贈の瓦－』 帝塚山大学附属博物館
- 林正憲 2009 「法隆寺西院伽藍の創建瓦」 『古代瓦研究Ⅳ』 奈良文化財研究所
- 清水昭博 2012 『古代日韓造瓦技術の交流史』 清文堂
- 荒木浩司ほか 2013 『史跡中宮寺跡発掘調査報告書』 斑鳩町教育委員会
- 帝塚山大学附属博物館編 2018 『東近江の古代寺院－東アジアからの道－』 東近江市埋蔵文化財センター・帝塚山大学附属博物館

元興寺文化財研究所 2019 『瓦仙人の世界－考古学者 藤澤一夫コレクションから－』

能勢麻由佳 2019 『ねえ、平隆寺って知ってる？－瓦でみる古代三郷の歴史－』

帝塚山大学附属博物館

山本剛史・瀬口泰弘・富島健司・長瀬好太郎 2019 『平隆寺とその周辺の古代瓦窯を歩く』

帝塚山大学考古学研究所

図版出典

図 1 国土地理院地図をもとに作成

図 2-1 毛利光ほか 1993 の P415 掲載 3Bb

図 2-2 同・4A

図 2-3 たなか 1978 の P176 掲載図 28-1

図 2-4 白石・亀田 1984 の P42 掲載図 29-053

図 3 国土地理院地図をもとに作成

図 4 国土地理院地図をもとに作成

図 5-1 帝塚山大学附属博物館編 2018 の P2 掲載写真 6

図 5-2 保井 1932 の掲載図版 57-疏瓦 6

図 6-1 花谷 2000 の P43 掲載第 14 図-1a

図 6-1 同・Ⅲa

図 6-3 佐藤 2000 の P156 掲載第 61 図-2

図 7 荒木ほか 2013 の P86 掲載図 49-1



写真1 生駒市高山町・北倭村窯推定地（右方丘陵、中央は富雄川、南上空から）



写真2 北倭村窯推定地（正面丘陵、南西上空から）



写真3 北倭村窯推定地（正面丘陵、北西上空から）



写真4 北倭村窯推定地（正面丘陵、西上空から）



写真5 北倭村窯推定地周辺（南上空から）



写真6 北倭村窯推定地周辺（中央は富雄川、北上空から）



写真7 北倭村窯推定地（正面丘陵、南西から）



写真8 北倭村窯推定地の丘陵傾斜面（西から）



写真9 北倭村窯推定地周辺（正面丘陵、南西から）



写真10 北倭村窯推定地周辺の丘陵傾斜面（北から）



写真11 北倭村窯推定地周辺での踏査風景



写真12 北倭村窯推定地踏査の参加者記念写真（ラジコンヘリによる撮影）



写真13 三郷町勢野東・北垣内窯推定地（正面中央にある平隆寺の後方、南上空から）



写真14 北垣内窯推定地（中央付近、北上空から）



写真15 北垣内窯推定地（道路より上方、南上空から）



写真16 三郷町勢野・今池瓦窯周辺（今池瓦窯は中央の池「今池」東岸、南西上空から）



写真17 北垣内窯推定地（中央丘陵、北東から）



写真18 北垣内窯推定地（中央丘陵、北東から）



写真19 今池瓦窯（今池の右斜面、南から）



写真20 北垣内窯推定地踏査の参加者記念写真（平隆寺にて）



写真21 三郷町共催遺跡ウォーク「平隆寺とその周辺の古代瓦窯を歩く」(移築先の辻ノ垣内瓦窯にて)



写真22 三郷町共催展「ねえ、平隆寺って知ってる? 一瓦でみる古代三郷の歴史」(展示風景・入口付近)



写真23 同（展示風景・「はじめに - 瓦の歴史 -」コーナー）



写真24 三郷町共催講演会「法隆寺の瓦を求めて - 聖徳太子と古代の三郷 -」（三郷町文化センター）



写真25 東近江市能登川博物館埋蔵文化財センター共催展示「東近江の古代寺院とその源流」(展示風景)



写真26 東近江市共催シンポジウム「東近江の古代寺院とその源流を探る」(能登川博物館)



写真27 東近江市共催展示関連イベント「ホンモノ古代瓦拓本体験」(能登川博物館)



写真28 城陽市歴史民俗資料館共催特別展「自瓦自賛」(開幕式)



写真29 同 (展示風景・入口付近)



写真30 同 (展示風景・展示室内)



写真31 島本町教育委員会共催企画展「鈴谷瓦窯と東大寺」(島本町歴史文化資料館)



写真32 共催企画展関連イベント「瓦ストラップ・マグネットづくり」(島本町歴史文化資料館)

平成 29 年度文部科学省私立大学研究ブランディング事業
『帝塚山プラットフォーム』の構築による学際的「奈良学」の研究」

聖徳太子関連遺跡の研究
－法隆寺創建瓦生産窯の調査－

令和 2 (2020) 年 3 月 14 日

編集・発行 帝塚山大学考古学研究所

〒631-8501 奈良市帝塚山 7-1-1

TEL 0742 (48) 9700 FAX 0742 (48) 8783

HP <http://www.tezukayama-u.ac.jp/social/institute/arch>

